

格助詞に着目した地名の要素分解

し ゃ け し げ ひ こ
初 宿 成 彦

はじめに

古人が地名を付けるにあたり、おそらくその場所に特徴的なものの存在を示す、すなわち「△のある場所」の意味で付けるのが、最初のステップであつただろう。

地名・人名を広く眺めていて、「な」「の」などの連体修飾の格助詞の有無が異なるだけの例が多数あることに気づいた（表1）。例えば「山の手」と「山手」は同義で、格助詞「の」は省略が可能である。渡部さんは、もし読みが「わたべ」さんであっても、ショッちゅう「わたなべ」さんと呼ばれていることであろう。

表1. 格助詞の有無だけで同義と考えられる地名・名字。

地名・名字	よみかた	格助詞	地名・名字	よみかた
栗生・阿尾	あお	の	穴生・穴太	あのお
井田	いだ	な	稻田	いなだ
伊庭	いば	な	稻葉	いなば
井本	いもと	な	稻本	いなもと
香川	かがわ	な	神奈川	かながわ
加太・嘉田	かだ	つ	勝田	かつた
川辺	かわべ	な	川那部	かわなべ
神戸	かんべ	な	神鍋	かんなべ
喜多・木田	きた	ぬ	砧	きぬた
佐田	さだ	な	真田	さなだ
須田	すだ	な	砂田	すなだ
瀬尾	せお	の	妹尾	せのお
多賀	たが	な	田中	たなか
田部	たべ	な	田辺	たなべ
津田	つだ	の	角田	つのだ
羽田	はた	な	花田	はなだ
		つ	初田	はつだ
三尾	みお	の	箕面	みのお
三上	みかみ	な	水上	みなかみ
三島	みしま	の	箕島	みのしま
水戸	みと	な	湊	みなと
壬生	みぶ	の	身延	みのぶ
三和・三輪	みわ	の	箕輪	みのわ
渡部	わたべ	な	渡辺	わたなべ

国内各地にある地名について、I. 語頭（＝名詞）+ II. 格助詞 + III. 語尾（＝存在を示す語：動詞を含む）に分解する試みを行なった。なお、人名（名字）も地名に由来する場合がほとんどであるため、本稿での考証に加えている。

I 語頭

本稿では便宜上、平仮名表記とする。

「△のある場所」の△に当たり、基本的にすべて名詞である。現代では漢字で表記されているため、意味についてはその漢字に引きずられ勝ちであるが、元の意味を惑わされないように留意する必要がある。しかし、意味がわからない場合も多数あり、それは現代では風習の中で失われてしまったものが、地名・人名に残っているからであろう。

あ：死者の靈ではないだろうか。青山、穴井、穴太、栗生など。仲松（1968）が沖縄において青地名「奥武」と葬送地との関連を述べ、谷川健一の目にとまって、広く知られるようになった（筒井、2015）。同様にアイヌ語でも「あの世」を「aw（隣）にある村」と表現するという（片山、1993）。元をたどれば、「あれ」「あの」といった指示詞「あ」

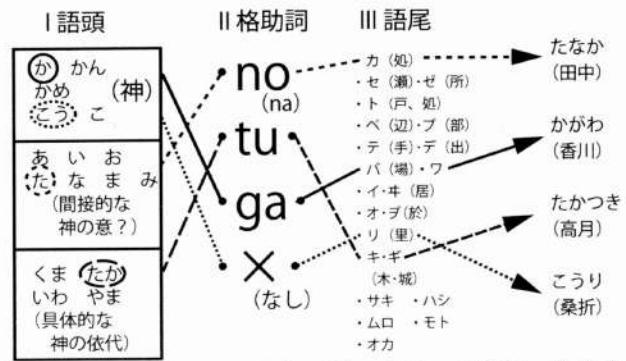


図1. 要素分解された地名4例。本稿では多数の地名を挙げているが、ほぼすべてこの図式に当てはめることができる。

が由来となっているかもしれない。また、次の「い」で知られるような、神に対する間接的呼称かもしれない。

い：片山（1991）は知里（1956）を引用し、アイヌ語で「それ」という意味の接頭語であること、神を直接呼ぶのを憚る際に使われること、を紹介している。現代韓国語でも、指示詞「これ」は「い」である。また、沖縄に残る御嶽^{うたき}にもヒントがあるような気がする。すなわち、内地の神社でいう本殿にあたる場所は「イビ」と呼ばれるが、文字通りに解釈すれば「い」の「場所」（「ぶ部」や「ベ辺」と同義）であり、「い」はやはりここでも、祀る対象（靈のようなもの）ではないだろうか。揖斐、衣斐などの地名・人名が知られる。他に、猪木、猪瀬、逸見、和泉、夷隅、伊庭、井上、伊勢などが関連する。それとはやや別に、生命力の強い自然物の称辞的接頭語（土橋、1990）としての使用例もあるだろう。筆者は生駒（「い」+「コマ」）がそれにあたるのではないかと考えている。

いわ：岩であり、具体的な神の依代を指している。また、石清水八幡宮、石見など、今日でも「いわ」と読む例があるように「石」も同源と考えられる。岩尾、岩塚、石塚、岩橋、岩手、岩出、岩坂など。

お：上述の「い」と同様、漢字で「御」で表されるように、次に続く神聖な言葉の接頭語になるものは含まれると思われるが（御神など）、岡田、尾瀬、尾上、尾場、乙羽、小野、織田、小津などからは、「お」自体に何らかの意味があると考えなくてはならない。「おお」（大）は「お」からの転化か（太田、大場、大野、大津）。

か：土橋（1990）では「神名の核とならない靈力」であるとされている。嘉田、加納、加山、加賀、可部など。神（下記）の省略の場合もあるだろうし、その語源の一部かもしれない。

かむ・かん：「かみ」（神）を指すと考えられる。神田、上村、神鍋。

く：「か」「き」から転化したものかもしれないが、何か別のものを表しているような気もする。朽

木、久美（浜）、九鬼、久世、久万など。指示詞の可能性として、韓国語で「それ」を「く」と呼ぶことと関連するかどうか？

くま：おそらく「かみ」は同源で、地名の場合、動物の「熊」ではなく「岩（隈）」のことだろう。「かめ」「こも」「こま」などもこの転化の結果かもしれない。熊野、熊井、熊川、亀梨、亀の瀬、亀戸、菰野、駒井、駒野、木間生など。

こう：「神」の転（楠原・溝手、1983）。神戸、甲賀など。短縮されて「こ」になった場合もあるかもしれない（大阪府能勢町神山）。ならば小山、古村なども関わってくるだろうか。

さ：佐山、佐野、嵯峨、薩摩、相模など。文字が日本に伝わる以前に信仰された、耕作と関わるサ神を早川（1942）が述べ、西岡（2009）がさらに深く掘り下げて紹介している。私は上述の「い」や下記の「そ」と同様に、直接的に神を呼ばないための指示詞由来も検討する必要があると考えている。

そ：曾我部、園部、曾我など。具体的に何を指すか不明であるが、「それ」「その」など現代でも用いられる指示詞を、上述の「い」と同様に、神を直接的に呼ぶのを避けるために用いたものかもしれない。

た：和歌森（1975）で、南部の人が「死後にはタナブに行くと語った」と紹介されている。た+格助詞「na」+ブ（部=辺）に分解できることから、「た」は靈のようなものではないだろうか。「田」の漢字が当てはめられることが多い、解釈には田と関連づけられることが多い。たしかに食糧確保は神に祈る大いなる関心事であったに違いないが、それ以外の漢字をあてる場合も少なくなく（多賀、武、多氣、多湖など）、すべてが「田」の意味であったとは考えにくいように思われる。印象では山の麓の地名に多く、やはり葬送や靈魂と関わりがあるように思われる。とにかく、「先祖の家が田んぼの中にあったから田中姓になった」というのは短絡的すぎて、た+格助詞 na +カ（処）と解釈すべきだろう。田辺、棚橋、太神など。

たか：神の依代である山を具体的に表す言葉と思われる。また、山名に付けられる「たけ」（岳）はこれが転化したものだろうか。高尾、高野、高田、高塚、高取、高輪、高部、高橋、高崎、高楓、高梨、武尾、竹野、武田、竹塚、建部など。死者の靈は山に行くところから、「た」のある「ところ（処）」=「たか」となり、さらに「高い」という形容詞の語源とも関わるかもしれない。楠原・溝手（1981）にも「形容詞タカシ（高し）の語幹」とある。

たま：身体に宿って身体とともに生死を共にする身体靈ないし生命力（土橋、2000）。玉木、玉田、玉川など。「魂」の語源の一部であろう。

は：上述の「あ」と類似したものと考えている。東北各地に葉山信仰が知られているが、葬送や祖靈との関連が岩崎（1976）に記されている。また、京都市・奈良市の東側に花山があるが、いずれも風葬地として知られた場所である。花山は、「は」+格助詞「na」+山と要素分解できる。和歌山市にも市街地の東にある。羽野、羽村、土生など。墓は「は」+「か（処）」が語源ではないだろうか。

ま：八百万の神の何かを指しているのだろうか。具体的には不明。とにかく「先祖の家に松と田んぼがあったから松田姓になった」のではなかろう。松木、松本、真野、間垣など。

み：上述の「お」と同じく、神の依代に付ける接頭語のような場合もあるだろうが（三上、御藏）が、箕面、身延など用例からは「み」単独で何らかの意味を持っていたと考えられる。神を直接あるいは間接に指すかもしれないし、「水」の意味の場合も含まれるかもしれない。楠原・溝手（1981）にも同様の著述がある。なお、筒井（2010）はこの古代語を目や耳と関連付けて言及している。

やま：「たか」と同様、神の依代としての山である。山尾、山野、山野井、山中、山下、山神、山梨など。

その他にも下記のように、現代では意味が不明の

1 音節語が多数ある。かつては何らかの意味を有していたのであろう。

う：宇野、宇賀、鶴戸、宇部など。

え：江村、江部、江川、榎木など。

け：気多、毛馬など。

し：志賀、篠田、信貴、芝、島など。

す：須賀、菅、須田、須磨、諫訪など。

せ：瀬尾、妹尾、瀬戸、関、瀬間など。

ち：千葉、千賀、知多など。土橋（1990）には「神名の核となる靈力の語」とある。筒井（2010）はこの古代語を乳や血と関連付けて言及している。

つ：都賀、津田、角田、角尾など。

と：戸部、戸川、戸田、登坂など。

な：長尾、永井、中尾、中瀬、中津、長野など。

「に」から変化した？（土橋、1990）。大地のことを古語で「なゐ」という（転じて地震を指す）ので、地中に居る神靈のようなものかもしれない。あるいは「あ」「い」と同様、神を指示する間接的表現か（現代語でも「あれ」を「なに」と言うことがある）。

に：仁尾、丹生、仁田、仁木など。泥土の生産力を表す語という（土橋、1990）。

ね：根尾、根津など。「に」から変化（土橋、1990）。

の：野木、能見、野田、能勢、野川、野中など。意味は不明。

ひ：比嘉、日比、日枝、日野、飛騨、氷川、比江など。土橋（1990）には「神名の核となる靈力の語」とある。

ふ：船尾、舟木、不破、船田など。

や：矢野、八木、谷部、藪、八ヶ場、矢田、柳井、八坂、八瀬。楠原・溝手（1983）には「いわの約」やのくまとある。岩熊（滋賀県長浜市西浅井町）の地名を見るとそんな気もする。

ゆ：湯川、由比、湯瀬、湯村など。「い」との近似性は土橋（1990）も述べており、その音韻変化と考えられる。

よ：与野、八鹿、与田。

わ：和田、脇。

ざ：藏王、座間。

II 格助詞

便宜上、ローマ字表記とする。

no 「の」：神の場所という意味の場合。

na 「な」：古語で同上の意で、「眼な子」「手な心」などが現代語でも残る。なお琉球語では nu であり（島主ぬ宝）、犬上、犬鳴、大貫、砧、小沼、衣笠などは、もし縄文語＝琉球語ならば関連するかもしれない。

tu 「つ」：上代以前に用いられた格助詞。天つ風、沖つ白波などの用例。転化して su（春日）あるいは濁音化して「du」「zu」（吾妻、小塚）になった場合もあるかもしれない。

ga 「が」：現代ではおもに主語と動詞の間におかれ（「神がいる」という場合など）が、我が國というように連体修飾にも使われる。清音の「ka」も同様だろう。永井、仲井、各務など。

格助詞なし：上記の連体修飾の格助詞は全て、省略が可能である。表1および上述の「山の手」の例。

Ⅲ語尾

以下では便宜上、カタカナ表記とする。

イ（ヰ）：「居る」の意（動詞）。岩井、金井、甲斐など。神+居で香美（兵庫県）か。

エ：「～のそば」の意。ベ（辺）と同義か。大江、日枝、三重など。

オ（ヲ）：漢字で表せば於（動詞）。「おる」、尊敬語なら「おられる」の意。瀬尾、三尾、神於（大阪府岸和田市）、加納、久能など。なお、矢野、宇野など主に「○の（野）」で表される地名・人名は「○の於」の短縮形で、神納（大阪府河内長野市）、官能など、「のう」と読む漢字を使っている例は、その名残の表記ではないだろうか。また、加茂（京都府）は神（kam）+於（o）であると考えている。

オカ：岡あるいは丘の意味だろうが、オ／カ（～の於の所）という要素分解も可能かもしれない。上岡、金岡、浅丘など。

力：在り処（か）として現代語に残る。處の義（大島, 1941）。「△塚」地名については後述。

キ：上述の「カ」の転化の可能性もあり、大島（1941）にも「處の義」とあるが、「キ」「ギ」には顯著な山に関連する場合が多い印象がある（伊吹、葛城、赤城、岩木など）。語頭に使われる場合も、多くは山の意味ではないかと思われる（大阪府池田市の木部神社は五月山の麓にあるが、「き」+「べ」=山の傍と解釈できる）。楠原・溝手（1983）では「タキ（高）、築（ツキ）の上略で高所をいうか」と簡単に述べられているにすぎない。

ケ：△-ka（格助詞）-「エ」（江）が詰まったものではないだろうか。ふけ（浮気、深日）、つけ（柘植、都祁）、まげ（馬毛〔島〕）、ゆげ（弓削）。

サキ：「～の前」の意。神崎、宮崎、山崎、岩崎など。「サカ」は語尾が a 音化したともみなせるが、位置的な近さのみならず多少とも地形的傾斜を伴うような気もするし、山自体を指している場合もあるかもしれない。上坂、金坂、赤坂（山）、逢坂（山）、大坂など。

セ（ゼ）：瀬のように川のほとりの狭い土地のような場所もあるが（大阪府柏原市亀の瀬）、単に場所を表している場合もあるようにも思える（伊勢、尾瀬）。奈良県御所や滋賀県大津市膳所は、その意味を意識して漢字を当てはめたのではないだろうか。

テ：「トの転なるべし」（大島, 1941）。現代語でも「右手に見える建物は・・・」のように方向を表す。岩手（岩手県）や岩出（和歌山県）はこのような例ではないだろうか。

ト：「止の義より出でて處の義」（大島, 1941）。「ド」「タ」はこの音韻変化かもしれない。加賀田（大阪府河内長野市）、上戸、神戸など。なお、「△津（つ）」は一般的に海や湖の畔と言われるが（滋賀県大津、滋賀県草津、静岡県沼津）、そうでない場合もあり（熊本県大津、群馬県草津）、この延長上のものかもしれない。

バ：場所を表すのに、現代語でも「交流の場」などで用いられる。「ワ（ハ）」との間で音韻変化を起こすことが考えられる。一例として、広島県比婆（ひば）郡に比和（ひわ）町がある。床の間などの「マ」もこの音韻変化の結果だろう。上縄（愛知県稻沢市）、神庭、古葉、河和（愛知県）、三輪、的場など。「△川・△河」「△沼」地名については後述。

ベ：辺。ブ（部）や「へ」、さらには「エ」（江）も同義だろう。

ハシ：人が渡る「橋」に関わった由来推定が多いが、古語で「いる」の尊敬語「おはす」（動詞）に由来する可能性はないだろうか。金橋、加賀橋、上橋、小橋、大橋など。

ミ：場所を表すように思われる。加賀見、浅見、辰巳など。楠原・溝手（1983）には「漠然とした場所を示す」とある。なお、安住、夷隅、和泉、稻積などは、「すむ（住む：動詞）」の意味かもしれない。楠原・溝手（1983）にも動詞としての用例の言及がある。

ムロ：「モリ（森）ムレ（牟礼）」も同義でヤマの意」と山中（1968）にある。ムロは「神の降臨するところ」という解釈を見たことがあり、「室」の字が当てられることが多いが、いずれにせよ広い意味で、やはりモリなどと同義であろう。地名・人名でよく用いられる「むら」はこの語尾a音化かもしれない。神室、小室、葉室、加村、勝村、古村。

モト：「～の下」あるいは距離的な近さであろう。河本、勝本、釜本、金本、古本、山本など。なお、山下、竹下も元来は「やまもと」「たけもと」なのかもしれない。

リ：針、桑折、香里、稻荷などは、「～のところ」の意味に思える。楠原・溝手（1983）にも「部分」「場所」も示すか、とある。「△取」地名については後述。

解釈を漢字表記に惑わされる4例

1. △川・△河の人名・地名

香川、上川、粉河などはどれも、水の流れを想像してしまうが、本稿の要素分解からは、神+格助詞「ka」+ワで、すべて水とは無関係の「神のいる場所」という意味の解釈となる。また、小川姓についても「先祖の家が小川の側にあったから小川姓になった」のではないかもしれない。なお古川（2007）は「中川川」なる川名の謎に言及している。筆者が考えるに、その理由は「中川」が川に由來した地名ではないからである。

2. △塚の人名・地名

たとえば、「竹塚」であれば、「竹の生えた小さな丘のようなもの」を想像するが、△+格助詞「tu」+「カ」（処）に分解すれば、「山のある所」という解釈となる。他に戸塚、赤塚なども同様であろう。

3. △取・△鳥の人名・地名

鳥取、熊取、笠取、青鳥、羽鳥、服部などは、△+格助詞「tu」+「リ」に要素分解すれば、すべて「△のある所」の意味になる。

4. △沼の人名・地名

当然のごとく「沼がある」と想像するが、△+格助詞「no」のウ音+「バ」の要素分解で、同様に「△のある所」の意味になる。上沼、小沼、田沼など。

柳田国男が述べたこと 一まとめにかえて一

地名・人名の多くが「△のある場所」の意味で成り立っていることを、本稿では示した。しかし、△の意味が現代では不明のことも多い。ただ、これまで述べてきたことを概観して一つ言えることは、人々が信仰していた神、あるいは「靈のようなもの」に基づいている場合が多そうだということである。

柳田国男はかつて、ひとつの集落にはその「氏」と呼ばれる单一の家系だけが住み、その祖靈である氏神を信仰していたとした（柳田、1946）。

地名と名字がかなり深い関わりを持っているのは事実である。本稿で示したように、要素分解していくと、実に多くの靈=八百万の神=が区別されて呼ばれ、その名を今日まで留めていると感じる。

農耕が開始される以前、たとえば狩猟・採集だけ

が行なわれていた縄文時代、柳田の言うように、単一の血縁で結ばれた家系がその祖靈を、それぞれの場所にあった山や岩などの自然物（＝依代）に置いて、それぞれが祀っていたと考えられないだろうか。また相互に敢えて違った呼び名にして、近隣の家系／集落同士を区別するという意味合いもあったかもしれない。そしてその結果として、今日に至る多種多様な名字も残存してきたのではないだろうか。

なお、本稿では「死」「靈」など、現代では非常に忌み嫌われている言葉が多数並びたてであり、そのような文字が名字や住んでいる地名に入っている方の中には、気分を害される方もあるだろうかと思う。しかし、かなり古い昔、人にとって死はもっと身近なものであり、寿命も短かったため、身近な死者を葬るということは、より日常的であっただろう。命の循環や蘇りを信じていて、自らが「あの世」へ行くということも、現代ほど抵抗が無かったのかも知れない。また、縄文遺跡から出てくる土偶や甕棺墓から考えられることとして、死者の亡骸を生活の近くに置き、遊離した靈が命を宿して新しく生まれてくることを期待して祈ったり祀ったりしたという。このように人々は、淡々と死に向きあい、日々暮らしていたのではないかと想像している。

（本会 会員）

引用文献

- 岩崎敏夫 1976. 山と日本人の祖靈觀－はやま信仰の周辺－。桜井徳太郎(編)、山岳宗教と民間信仰の研究: 83-103. 名著出版、東京。
- 大島正健 1941. 国語の語根とその分類。第一書房、東京。449pp.
- 片山龍峯 1991. 呪力信仰と市の起源～呪力と関わる言葉「イ」について。DOLMEN Vol. 5: 97-117.
- 片山龍峯 1993. 日本語とアイヌ語。すずさわ書店、東京。325pp.
- 楠原佑介・溝手理太郎 1983. 地名用語語源辞典。東京堂出版、東京。662pp.
- 知里真志保 1956. 地名アイヌ語小辞典。北海道出版企画センター、札幌。169 pp.
- 土橋寛 1990. 日本語に探る古代信仰。中央公論社、東京。217pp.
- 筒井功 2010. 葬儀の民俗学。河出書房新社、東京。193pp.
- 筒井功 2015. 「青」の民俗学 地名と葬制。河出書房新社、東京。207 pp.
- 西岡秀雄 2009. なぜ、日本人は桜の下で酒を飲みたくなるのか?。PHP研究所、東京。213pp.
- 早川孝太郎 1942. 農と祭。ぐろりあ・そさて、東京。296pp.
- 古川純一 2007. 日本超古代地名解一地名から解く日本語の語源と古代日本の原像。彩流社、東京。503 pp.
- 山中襄太 1968. 地名語源辞典。校倉書房、東京。458pp.
- 柳田国男 1946. 先祖の話。筑摩書房、東京。253pp.
- 和歌森太郎 1975. 山岳宗教の成立と展開。名著出版、東京。388 pp.